



疑似動作主の意味特性：疑似コントロール構文と語彙的複合動詞への文法機能

齋藤，紀子

(Citation)

神戸言語学論叢, 9:23-44

(Issue Date)

2014-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/81005928>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005928>



擬似動作主の意味特性： 擬似コントロール構文と語彙的複合動詞への文法機能

齋藤紀子

神戸大学大学院

1. はじめに

影山 (1993) は、日本語の複合動詞の語形成には、少なくとも統語が関与していることが明らかな統語的複合動詞と、関与が認められないと考えられる語彙的複合動詞の二種類があることを示した。「読み始める」「読み終える」などの統語的複合動詞にみられる補文構造は、英語をはじめ多くの自然言語において観察される統語現象である。対照的に、「押し上げる」「駆け上がる」など動詞と動詞が複合した形態を有する語彙的複合動詞は個別言語の特徴とされている。英語では、*freeze-dry*、*stir-fry*、*dry-clean*、*drink-drive* など僅かな例外はあるものの、**push-raise*、**run-rise* のような語彙的複合動詞に匹敵する語形成はみられず、*push up*、*run up* のように複合動詞の後項動詞部分が小辞 (particle) によって表現されることが多い (Plag 2003: 154、岸本 2005: 47)。

日本語の複合動詞の語形成は、他言語との対照研究を通して普遍性と個別性の両面が明らかにされてきた。統語的複合動詞の語形成は、生成文法の枠組みからその統語現象が研究され (Shibatani 1973、Nakau 1973、柴谷 1978、久野 1983、影山 1993)、また、語彙的複合動詞の語形成は、個別言語としての独自性のほか、他言語との共通性が示されてきた (影山 1993、Matsumoto 1996、由本 1996、2005、松本 1998、Fukushima 2005、Nishiyama 1998、Saito 2000、長谷川 1999)。

本論文では、コントロール構文において、PRO の義務的同定の適応性を決定づけるのは、主節動詞による選択制限ではなく、先行詞に有生名詞を要求するという PRO による共起制限にあるとの分析 (岸本 2005: 53) が有効であることを論じる。その根拠の一つとして、擬似コントロール構文 (pseudo-control construction: Pustejovsky 1995) を取り上げる。コントロール構文の特徴に、主節動詞による有生物主語の指定が挙げられるが、(1)の擬似コントロール構文は、無生物主語を容認する。

- (1) a. The leaves have finished falling.
b. 葉が散り終えた

無生物主語の自律的な振る舞い (autonomous behaviour) によって補文が表すイベントが終了することを表す擬似コントロール構文は、Pustejovsky (1995: 206) によると、主語名詞句の特質構造 (qualia information) が、あたかも動作主であるかのような擬似動作主 (pseudo-agent) の解釈を持つために、文法的に容認されるという。しかしながら、統語的複合動詞における擬似動作主の解釈は、補文主語による自律的行為を表すという補文の事象に起因する。このことから、本論文では、擬似動作主としての解釈を得た補文主語は、主節にコントローラーを要求する PRO として補文に現れることができると仮定する。その上で、擬似コントロール構文が成立するには、PRO の共起制限に従って擬似動作主に相当する意味役割が主節動詞から付与されること、および、主節動詞によるアスペクト制約に違反しな

いことが必要な条件であることを明らかにする。

次に、自動詞化する統語的複合動詞と語彙的複合動詞を取り上げる。(2)の統語的複合動詞と(3)の語彙的複合動詞が自動詞化を引き起こす要因の相違点と相似点を示す。

- (2) a. 太郎がセーターを編み終えた / セーターが編み終わった
 b. 店員が本を売り切った / 本が売り切れた
- (3) a. 太郎がセーターを編み上げた / セーターが編み上がった
 b. 太郎が花火を打ち上げた / 花火が打ち上がった

統語的複合動詞の自動詞化には、(2a)の補文動詞の内項名詞句「セーター」のように、その出来上がりの時点を事態転換点として、動作主が関与を続ける補文の継続事象に対して境界を設ける (measure out: Tenny 1992, 1994) ことが要因となるケースと、(2b)のような売買の事象フレーム (frame: Fillmore 1985) における買い手という背景行為者の解釈が要因となるケースがあることを示す。その上で、完了アスペクトを表すとされる(3a)の語彙的複合動詞では、複合動詞が表す状態変化の到達点 (goal) として指定される内項名詞句「セーター」が状態変化の結果状態を表すことが自動詞化の要因となることを示す。また、アスペクトを表さない(3b)の語彙的複合動詞では、使役者の影響から離れた被使役者の動きが自律的振る舞いをする主体行為として解釈されることが自動詞化の要因になることを示す。

本論の構成は以下のとおりである。まず、第2章で、コントロール構文にみられる主語制約に関して、先行詞に有生名詞を要求するという PRO による共起制限の分析 (岸本 2005: 53) を取り上げ、主節名詞句による補文 PRO の義務的同定という現象を効果的に説明できることを示す。さらに、コントロール構文の成立条件である PRO の共起制限を、統語的複合動詞にみられる非対格性 (unaccusativity) から論じる。第3章では、無生物主語が容認される疑似コントロール構文を取り上げる。主節動詞「終わる」と「終える」の振る舞いの違いを通して、補文主語が疑似動作主として解釈されることが、および PRO の共起制限が満たされることによって、PRO が補文に現れる条件が整い、疑似コントロール構文が成立できることを示す。第4章では、自動詞化する統語的複合動詞と語彙的複合動詞を取り上げ、その相似点と相違点を示す。「編み終わる」や「編み上げる」などアスペクトを表す複合動詞は、内項名詞句が状態変化の終了点 (end-point) を指定するが、統語的複合動詞は内項名詞句が限界点 (delimiter) を、語彙的複合動詞は内項名詞句が結果状態を表すことが自動詞化の要因になることを示す。さらに、アスペクトを表さない複合動詞の「打ち上げる」や「売り切る」の自動詞化は、統語的に具現化する動作主とは異なる別の行為者が存在するという事象解釈が自動詞化の要因になることを示す。第5章はまとめである。

2. コントロール構文

2.1. PRO の共起制限による義務的同定

(4)に挙げる英語の to 不定詞の統語構造は、主節動詞が補文を取る構造であり、(4a)は上昇構文、(4b)はコントロール構文として区別される。(4a)の上昇構文では、補文に生成した名詞句が主格を得るために移動するのに対し、(4b)のコントロール構文では、補文に生成した名詞句に格付与はされず、音形のない代名詞の PRO (null pronoun) が現れると仮定される (PRO Theorem: Chomsky 1981)。

- (4) a. John_i is likely [t_i to leave]. (Carnie 2007: 395)
 b. John_i is reluctant [PRO_i to leave].

(4a)は(5a)のように、that 節を用いて補文主語の名詞句を明示した文に言い換えることが

できないのに対し、(4b)は(5b)への言い換えを許す。

- (5) a. *John is likely that he will leave.
b. John_i is reluctant that he_{i/k} will leave.

しかしながら、(5b)の場合、補文主語にあたる代名詞の *he* は主節主語の *John* と同一人物を指す解釈ができる一方で、*John* とは異なる文中に現れない別の男性を指す解釈も可能である。対照的に、(4b)では補文主語の *PRO* は、主節主語と同じ *John* を指す解釈しか持たない。すなわち、(4b)のコントロール構文では、主節主語の名詞句が音形のない代名詞の *PRO* を義務的に同定するコントローラーとして働いていることがわかる (Control Theory : Chomsky 1981)。

日本語の統語的複合動詞も上昇構文とコントロール構文を持ち、上昇構文は(6a)、コントロール構文は(6b)の補文構造が仮定される (Shibatani 1973、柴谷 1978、Nakau 1973、久野 1983、影山 1993: 140)。統語的複合動詞では、(7)に示すように、形式名詞「こと」を挿入した文の容認性に構文の違いが現れる (長谷川 1999: 109)。(7b)は「太郎」が主節動詞と補文動詞の主語を兼ねていることから、(6b)では主節主語「太郎」がコントローラーとして *PRO* を義務的に同定していることがわかる。

- (6) a. 太郎_iが [*t_i* 新聞を読み] かけた
b. 太郎_iが [*PRO_i* 新聞を読み] 終えた

- (7) a. *太郎が新聞を読むことをかけた
b. 太郎が新聞を読むことを終えた

上昇構文とコントロール構文の違いは、主節主語の選択制限に端的に現れる。上昇構文の(4a)は、(8a)の実質的には意味のない虚辞の *it* が統語的な主語として現れる形式主語構文や、(8b)の *that* 節を主語とする節主語構文への置き換えが可能である。それに対し、コントロール構文の(4b)は、(9)が示すように、そのような置き換えが許されない。

- (8) a. It is likely [that John left]. (Carnie 2007: 396)
b. [That John left] is likely.

- (9) a. *It is reluctant [that John left]. (Carnie 2007: 401)
b. *[That John left] is reluctant.

日本語には形式主語文は存在しないが、コントロール構文には無生物主語に対する制限が存在する。その根拠として挙げられるのが(10)の例である。(10a)の上昇構文では無生物主語の「雨」が容認されるのに対し、(10b)のコントロール構文では「雨」を主語にすることはできない。

- (10) a. 雨_iが [*t_i* 降り] かけた
b. *雨_iが [*PRO_i* 降り] 終えた

(10b)のコントロール構文における主語の選択制限に関して、影山 (1993: 140)、長谷川 (1999: 115) では、主節動詞に有生物主語を指定するという選択制限があるため、主節主語が義務的に同定する *PRO* においても有生物主語が必要とされると説明がされている。それに対し、岸本 (2005: 53) は、補文主語である *PRO* が先行詞に有生名詞を要求するという *PRO* による共起制限のため、無生物主語が許されないとの説明を提示している。

コントロール構文の主語の選択制約を、補文主語である *PRO* との共起制限によって説明する場合、重要になるのは、補文動詞も *PRO* に意味役割を与える点である (Chomsky 1981、

岸本 2005: 53)。岸本に従えば、補文主語である PRO 自体が有生物を指さねばならないという性質を持つがゆえに、PRO が持つ意味役割がコントローラーである主節主語にも要求されるということになる。つまり、この共起制限によって主節主語に意味役割を付与する主節動詞に制約が生じ、その結果、(10b)のコントロール構文は無生物主語を取らないと説明される。

コントローラーを必要とする PRO の性質は、PRO に音形がないことが関与していると考えられる。(5b)に挙げた *that* 節構文で補文に位置する代名詞の *he* は、主節の *John* を指標とするだけでなく、*John* 以外の文外の人物を指標にすることもできる。代名詞がその意味を文外から得ることができるのは、代名詞が束縛領域で束縛を受けないためであるが、対照的に、音形の無い代名詞と仮定される PRO は、代名詞と同じく束縛はされないが、先行詞にコントロールされる。このコントローラーを必要とする PRO の性質は、PRO に音形がないがゆえにその意味を文外から得ることができず、文を構成する別の名詞句から意味を受け入れなければならないという必然性にあると考えられる。

PRO 自体が有生物を指さねばならないという性質を持つことは、(11)からわかる。

- (11) a. [PRO to leave now] would be impolite.
b. [PRO to find a new mate], go to a dating service. (Carnie 2007: 412)

(11)は、PRO が必ずしも主節の名詞句から義務的に同定されるとは限らず、文外から意味を得る場合があることを示しているが、この場合の PRO は「誰か」「私達」のような不特定の人を指す。この PRO の現象は、PRO 自体に有生物を指標に要求する性質があるためだと考えられる。

また、PRO が持つ意味役割と同じ動作主を指標に求める性質があることは(12a)からわかる。(12a-b)は無生物の *the boat* を主節主語とするが、主節が受動態を取る(12a)はコントロール構文が成立するのに対し、主節が自動詞である(12b)では容認されない (Williams 1985、Roepers 1987、Bhatt and Pancheva 2006)。

- (12) a. The boat was sunk [PRO to collect the insurance]. (Landau 2000: 22)
b. *The boat sank [PRO to collect the insurance].

(12)の主節でみられる受動態と自動詞の関係は(13)のようになる。

- (13) a. John sank the boat.
b. The boat was sunk by John.
c. The boat sank (*by John).

(13a)では、他動詞 *sink* の外項 (external argument: Williams 1980) が主語に、内項 (internal argument) が目的語に現れる。(13a)の受動態である(13b)は、外項を失業項 (chomeur: Perlmutter 1978) として斜格に降格 (demotion) させ、また内項を主語に昇格 (advancement) させるという統語操作によって生じると考えられるため、能動態文(13a)と受動態文(13b)で論理的な意味が変わることはない (Levin and Rappaport Hovav 1995)。一方、他動詞の(13a)が使役交替 (causative alternation) した自動詞の(13c)は、外項を具現化できない。これは、(13a)の他動詞が有する使役意味構造において、使役者を抑制するという語彙的操作によって、使役者が項として表出することがない(13c)の自動詞が形成されるためと考えられる (Levin and Rappaport Hovav 1995)。

したがって、コントローラーが主節内に現れていなくとも(12a)がコントロール構文として成立するのは、動作主を表す外項を斜格として統語的に表出できる環境が(12a)の主節にあるからだといえる。対照的に、(12b)の主節動詞は動作主性を持たない自動詞のため、動作主という PRO が持つ意味役割を与えることができず、(12b)の文は容認されない。

上昇構文とコントロール構文の違いは、英語でも日本語でもイディオム解釈の違いに現れる (Carrie 2007: 404, 岸本 2005: 50)。(14a)には<猫が袋から出る>という文字通りの意味での解釈と、<秘密が漏れる>というイディオムの解釈が存在するが、(14b)の *is likely* を主節述部とする上昇構文では双方の解釈が成り立つのに対し、(14c)の *eager* を主節動詞とするコントロール構文では文字通りの解釈しか得られない。日本語においても同様であり、「閑古鳥が鳴く」には<カッコウが鳴く>という文字通りの意味での解釈と、<客足が遠のく>というイディオムの解釈が成り立つが、(15a)の「かける」を主節動詞とする上昇構文では双方の解釈が成り立つのに対し、(15b)の「終わる」を主節動詞とするコントロール構文では文字通りの解釈しか得られない。

- (14) a. The cat is out of the bag. (Soames and Perlmutter 1979: 106)
 b. The cat_i is likely [t_i to be out of the bag].
 c. The cat_i eager [PRO_i to be out of the bag].

- (15) a. 閑古鳥_iが [t_i 鳴き] かけた
 b. 閑古鳥_iが [PRO_i 鳴き] 終わる

一方、文字通りの解釈とイディオムの解釈が(16)では可能である。このため、(14c)では有生物主語を指定するという主節動詞による主語の選択制限によって、主節名詞句がコントロールする PRO に有生物主語を要求しているかのようにも見える。

- (16) The cat_i is eager for the cat_{i/k} to be out of the bag. (Soames and Perlmutter 1979: 108)

しかしながら、(14c)や(15b)でイディオム解釈が容認されないのは、主節名詞句にコントロールされるという PRO の性質によるものではなく、イディオムがもつ隣接性 (adjacency) の喪失が要因であると考えられる。イディオムが持つ隣接性には、(17a)の使役形態素や(17b)の修飾語句などの挿入、(17c)の関係節化、(17d)に挙げるイディオム内部の要素を代名詞で置き換えるという統語操作を受け入れないという制約がある。

- (17) a. *閑古鳥を鳴かせた
 b. *閑古鳥がうるさく鳴く
 c. *鳴いた閑古鳥
 d. *それが鳴く

(15a)の上昇構文では、もともと補文主語位置にある「閑古鳥」が主節に移動しても、補文主語位置に痕跡が残る。この痕跡によってイディオムの隣接性が保たれるため、イディオム解釈が可能になる。一方、(15b)のコントロール構文では、補文を構成する統語要素として PRO の存在がある。PRO が音形のない代名詞として機能する限り、(17d)で示したイディオム内部の要素を代名詞では指せないというイディオムの隣接性に反するため、コントロール構文では文字通りの解釈しか得られない。すなわち、先行詞にコントローラーを要求するという PRO が持つ共起制限のために、補文のイディオムが成立しないといえる。

英語の *to* 不定詞や統語的複合動詞の補文構造が、上昇構文を構成するかコントロール構文を構成するかは、主節動詞との間に一定の関係が見出せるのは事実である。このため、補文 PRO に対してコントローラーとして働く名詞句を取る動詞はコントロール動詞 (control verb)、補文名詞句を主節に移動させ格付与する動詞は上昇動詞 (raising verb) と呼ばれる。しかしながら、コントロール構文にみられる主語制約は、コントロール動詞による主語名詞句の選択制約によるものという説明からではなく、有生物を指標とする PRO の共起制限の反映という説明の方が、主節名詞句が補文 PRO のコントローラーとして働くことを効果的に説明できることを示した。

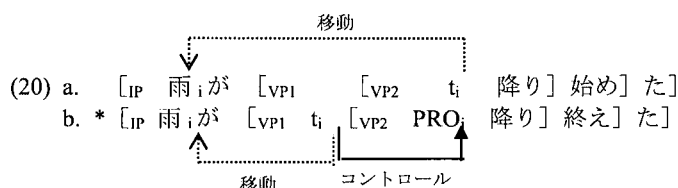
2.2. 非対格仮説と同定制約

英語の *to* 不定詞や統語的複合動詞において補文構造を構成する動詞には、(18)と(19)に示す *begin* や「始める」のように、上昇動詞としてもコントロール動詞としても機能する動詞がある (Perlmutter 1970、Shibatani 1973、影山 1993)。この事実は、主語を指定するという主節動詞の選択制限に基づく統語的操作からでは、構文選択に対する統一的な説明が得られないことが示唆される。

- (18) a. It began to rain. (Perlmutter 1970: 107)
b. Zeke began to work.

- (19) a. 雨が降り始めた
b. 太郎が走り始めた

長谷川 (1999: 115) は、統語的複合動詞の主語制約の容認性の違いについて、(20)の統語構造から説明している。



長谷川によると、(20a)の上昇構文では主節動詞の「始める」が主語を持たず、補文に生成した主語の「雨」が主格を得るために、IPの指定部に移動する。その結果、文全体の主語は補文動詞が取る主語「雨」が担うことになる。対照的に、(20b)のコントロール構文では、主節動詞「終える」の主語が補文に生成した主語 *PRO* を義務的に同定するため、文全体の主語には補文動詞とも意味的な整合性が求められることになる。したがって、(20a)の上昇構文では、「雨」が補文動詞「降る」の主語として適切であるので文法的と判断されるのに対し、(20b)のコントロール構文では、主節動詞の「終える」が「雨」のような無生物を主語として選択しないため、たとえ補文の主語としては適切であっても、主節主語が *PRO* を同定することができず、容認されないという。すなわち、(20b)の統語構造は、コントロール構文における主節主語と補文 *PRO* が、どちらも有生物である必要性を示していることになる。しかしながら、(21)は容認されない。

- (21) a. *太郎が転び終えた
b. *太郎が倒れ終えた

主節動詞の主語の選択制限に違反していないにも関わらず(21)が容認されないことは、主節主語が *PRO* との義務的同定を果たす上で、主節動詞と補文動詞が共に有生物主語を取ることがコントロール構文成立の条件とはならず、別の制約があることを示している。

(21)は、補文動詞が非対格動詞 (unaccusative verb) の場合には、コントロール構文が成立しないことを示唆する。非対格動詞とは、非対格仮説 (Unaccusative hypothesis : Perlmutter 1978、Burzio 1986) に基づくもので、統語的な振る舞いの観点から自動詞を二つに下位分類した一つである。下位分類した自動詞のもう一つに非能格動詞 (unergative verb) がある。非能格動詞、非対格動詞、他動詞には、それぞれ(22)の基底構造が仮定される。

- (22) a. 非能格動詞 : [VP DP [V' V]]
 b. 非対格動詞 : [VP [V' V DP]]
 c. 他動詞 : [VP DP [V' V DP]]

(22)は、非能格動詞の唯一項が基底構造で他動詞の主語と同じ位置に生成され、また非対格動詞の唯一項が基底構造で他動詞の目的語と同じ位置に生成されることを示している。自動詞の唯一項は下位分類によって区別され、非能格動詞の唯一項は外項、非対格動詞の唯一項は内項と呼ばれる。表層構造では(23)に示すように、非能格動詞と他動詞では外項が IP へ移動し、非対格動詞では内項が IP へ移動することで、それぞれ主語になる。

- (23) a. 非能格動詞 : [IP DP_i [VP t_i [V' V]]]
 b. 非対格動詞 : [IP DP_i [VP [V' V t_i]]]
 c. 他動詞 : [IP DP_i [VP t_i [V' V DP]]]

非対格仮説に基づけば、表層構造で仮定される補文 PRO の存在は、基底構造の補文動詞の外項 (以下、補文外項) の存在によると考えられる。つまり、統語的複合動詞におけるコントロール構文の本質を、有生物を指さねばならない PRO が、主節のコントローラーに対して有生名詞を要求するという補文 PRO の共起制限にあると仮定すると、その表層構造における共起制限が、補文外項が同一指標の外項を主節動詞に要求するという基底構造の同定制約を反映していると考え難くない。

(21)において、主節動詞と補文動詞が共に有生物主語を選択していても非文法的と判断されるのは、主節主語が補文 PRO のコントローラーに成り得ないためであると考えられる。このことを非対格仮説に従って説明すると、(24b)のように、基底構造において補文外項と主節動詞の外項 (以下、主節外項) の同定制約が成立しないことが、非文法的と判断される要因であるといえる。

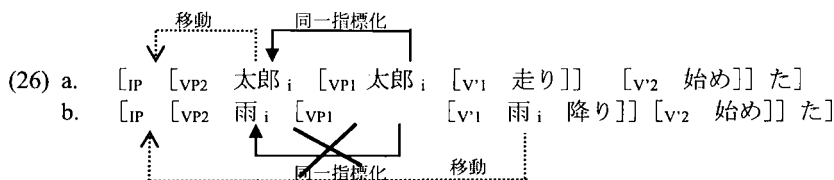
- (24) a. [IP [VP₂ 太郎_i [VP₁ 太郎_i [V' ₁ 走り]] [V' ₂ 終え]] た]
 b. * [IP [VP₂ 太郎_i [VP₁ [V' ₁ 太郎_i 転び]] [V' ₂ 終え]] た]
-

主節動詞の「終える」は外項と内項を持つ二項動詞である。主節動詞が他動詞で、かつ、補文動詞が他動詞または非能格動詞の場合、これらの動詞は外項を持つ点で共通しているため、(24a)に示すように、主節外項と補文外項とは同一指標化できる。一方、(24b)の補文動詞が非対格動詞の場合には、非対格動詞は外項を持たないため、主節外項との同一指標化を図ることができず、非文法的と判断される。このことから、コントロール構文が成立するには、少なくとも基底構造において補文外項が主節外項と同一指標化される必要があるといえる。

補文にイディオムを持つ(25)でも同様の非対格性 (unaccusativity) が確認できる。非対格自動詞の「なる」を補文動詞とする(25a)は有生物主語を取っているが、イディオム解釈はもとより、文字通りの解釈も容認されない。また、(25b, c)も(25a)と同じく容認されないが、これらの補文動詞である「届く」「切れる」も非対格自動詞である。(25)が容認されないのは、補文動詞が非対格自動詞のために PRO に成り得る外項が存在しないからだといえる。

- (25) a. *ミイラ取りがミイラになり終える
 b. *痒い所に手が届き終える
 c. *堪忍袋の緒が切れ終える

「始める」は「終える」と同じく外項と内項を持つ二項動詞であるが、(19)で示したようにコントロール構文と上昇構文を取る。主節動詞「始める」の統語構造は(26)のように仮定することができる。(26a)は「始める」が非能格動詞を、(26b)は非対格動詞を補文に取る場合の統語構造で、(26a)はコントロール構文、(26b)は上昇構文である。



(26a)の非能格動詞を補文に持つ「走り始める」では、外項同士で同一指標化が成立するためコントロール構文を構成する。対照的に、(26b)の非対格動詞を補文に持つ「降り始める」は補文の唯一項が内項であり、主節外項は同一指標化によって意味役割の情報を得ることができない。このため、主節動詞の「始める」は外項を取らない。つまり、補文にPROに成り得る外項が存在しない「降り始める」は主節にコントローラーを必要とせず、結果として、表層構造において補文の内項がIPの指定部に移動する上昇構文を構成すると仮定することができる。

統語的複合動詞におけるコントロール構文の本質をPROが先行詞に有生名詞を要求するというPROの共起制限とし、補文外項が主節に同一指標の外項を要求するという基底構造の同定制約は、共起制限を反映したものであると仮定すると、補文動詞に非能格動詞や他動詞をもつ(27)が容認されないことは反例のようにみえる。しかしながら、(27)にみられる容認性の低さは、主節動詞「終える」によるアスペクト制約が関与していると考えられる。

- (27) a. ??子供が暴れ終えた
b. *太郎が花子を待ち終えた
c. *太郎が家族を持ち終えた

(27a)の補文動詞「暴れる」は、限界性 (telicity: Dowty 1991, Tenny 1992, 1994) を持たない活動動詞 (activity verb: Vendler 1957) である。また、補文が対象の未到着を表す(27b)や、補文が所有事象を表す(27c)は、補文動詞句が表す事象に終了点 (end-point) が含意されない。補文事象が持続的動作や状態を表す(27)が容認されないということは、主節動詞「終える」の補文が何らかの達成イベントを表す必要があるということを示している。事実、(28)の移動経路を表すヲ格句や、移動範囲の到達点を表すマデ格句 (影山 1997: 141) が共起する場合、あるいは(29)のようにコンテキストによって到達点 (delimiter) が想定できる場合には、文法的であると判断される (Nishigauchi 1993)。

- (28) a. 太郎がマラソンコースを走り終えた
b. 太郎が {*通学路を／駅まで} 行き終えた
- (29) a. 太郎が大学を {4年間／4年で} 行き終えた
b. 太郎が新作ゲームを {30分間／30分で} 遊び終えた

「行き終える」は、(28b)の物理的な移動表現においてはヲ格句で移動経路が取れないが、(29a)の抽象的な移動表現ではヲ格句が取れるようになり、「4年間」と「4年で」という二種類の時間副詞が共起する。これら二種類の時間副詞は、(28)に挙げた物理的な移動表現において、異なる振る舞いをみせる。

- (30) a. 太郎がマラソンコースを {*30 分間/30 分で} 走り終えた
 b. 太郎が駅まで {*30 分間/30 分で} 行き終えた

物理的な移動を表す(30)では、「マラソンコース」が移動範囲を限定した経路として働く(30a)や、マデ格句で移動範囲の到達点が指定される(30b)は、移動経路の限界に達するまでの所要時間を表す「30 分で」の共起のみが許され、「30 分間」は容認されない。このことは、ヲ格名詞句の「マラソンコース」が補文動詞「走る」の漸次的対象 (incremental theme : Dowty 1991、Tenny 1994) として働いていることを示す。つまり、「走る」という継続事象を終結させる終了点 (以下、継続事態終了点) を「マラソンコース」が含んでいるため、ヲ格句で表す移動経路が漸次的対象として働くといえる。また、抽象的な移動を表す(29a)でも「4 年で」は「行く」という継続事象に対して、ヲ格名詞句の「大学」が含意する継続事態終了点までの到達所要時間として働く。その一方で、(29a)の抽象的な移動表現では、物理的な移動表現が容認しない「4 年間」という時間副詞を許す。これは、「4 年間」が時間的な区切りとして継続事態終了点を含み、「行く」という継続事象が遂行される時間を限定する表現として働くためと考えられる。したがって、「4 年間」が共起する場合は大学在学中であると解釈され、「4 年で」の場合には、大学を卒業したと解釈されることになる。

これらのことから、主節動詞「終える」には、補文が表す事象に何らかの終了点を必要とするというアスペクト制約が存在することがわかる。この主節動詞によるアスペクト制約に違反するため、補文動詞に非能格動詞や他動詞をもつ(27)が非文法的と判断されると考えられる。

ただし、アスペクト制約の関わり方は主節動詞によって異なる。影山 (1993:153) によると、「尽くす」を主節動詞とするコントロール構文の(31a)は、鉱山を掘った結果、鉱山が尽くされることを表すという。

- (31) a. 政府が鉱山を掘り尽くした
 b. 太郎が財産を使い尽くした

すなわち、「尽くす」を主節動詞とする(31)でも、終了点がアスペクト制約として関わるが、「尽くす」が主節動詞の場合には、補文の内項名詞句によって示された対象物の全数量がなくなることが、補文が表す継続事象の終了点として働くと考えられる。また、対象物の数量限定は内項名詞句に限らず、(32)のようにマデ格句や時間によっても指定される。

- (32) a. 太郎が涙が枯れるまで泣き尽くした
 b. 太郎が3ヶ月間泣き尽くした

以上、コントロール構文の成立条件を、統語的複合動詞にみられる非対格性から論じた。コントロール構文の成立に、外項を持つ他動詞または非能格動詞が補文に必要とされるのは、補文主語が動作主という意味役割を得ることで、主節に有生物のコントローラーを要求する PRO の条件を満たすためであることを示した。さらに、PRO の共起制限とは別に、主節動詞が与える制約として、補文が表す事象に何らかの終了点を必要とするアスペクト制約が存在することを示した。

3. 擬似コントロール構文

英語には(33a)のような無生物主語を取る *finish* の自動詞構文がある。Pustejovsky (1995: 207) は、(33a)を自動詞コントロール構文 (intransitive control constructions: Pustejovsky and Bouillon 1995) と呼び、主語位置にある名詞が動作性を有することで、無生物主語が事象をコントロールしている解釈が可能になり、文法的と判断されるという。

- (33) a. Class will finish at 2:00 pm. (Pustejovsky 1995: 207)
 b. ??The party finishes at midnight.
 c. *The rain will finish by noon.

(33)は主語位置の名詞のタイプによって容認性が異なる。(33a)の *class* は、ある動作主によりコントロール可能であるので文法的と判断されるが、(33b)のような、ある動作主によりコントロールが難しい *party* では容認性が下がり、動作主によるコントロールが不可能な *rain* においては、(33c)に示すように非文法として判断されることになる。

日本語でも(34)に挙げるように、無生物主語を取る自動詞「終わる」の用法が同様に観察できる。しかしながら、「終わる」は(35a)のような自然現象を表す名詞句も主語に取る。このため、動作主性を含む名詞句を主語に取る場合には「終わる」に無生物主語が許されると考えることはできない。

- (34) a. 授業が午後2時に終わる
 b. パーティが真夜中に終わる
 c. *雨が正午までに終わる
- (35) a. {梅雨／猛暑}が終わる
 b. *The rainy season will finish.

その一方で、(36)に挙げるように「終わる」は同形で他動詞用法を持ち、その容認性は、(33)に示した自動詞の *finish* と並行する。

- (36) a. 授業を午後2時に終わる
 b. ??パーティを真夜中に終わる
 c. *雨を正午までに終わる
 d. *梅雨を明日までに終わる

一般的に「梅雨」には始まりと終わりがあると認識されているが、「雨」は降り始めや降り止む時間が定められるものとの認識はない。つまり、自動詞「終わる」は、主語位置の名詞句が終了点のある継続事象を表せば、容認される。一方、他動詞「終わる」は、動作主によるコントロールが可能な到達点のある継続事象を表す名詞句を目的語に取る場合のみ、容認されるといえる。

自動詞の「終わる」は「終える」との使役交替による語形成であるが、他動詞の「終わる」は自動詞の「終わる」からの逆形成による生成であると考えられる。使役交替では、他動詞の使役意味構造において使役者が抑制されることで使役者が項として具現化しない自動詞が形成される (Levin and Rappaport Hovav 1995、影山 1996: 183)。すなわち、使役交替する自動詞の唯一項は内項にあたる。この内項の名詞句が動作性を有することで、事象をコントロールする動作主を表す外項が具現化され、他動詞「終わる」が形成されたと考えられる。(33)の自動詞コントロール構文に対応する日本語での表現は、(36)のように他動詞「終わる」が用いられるため、「終わる」による自動詞コントロール構文は存在しないことになる。

(37a)は主節動詞の「終わる」が、(37b)は主節動詞の「終える」が補文構造を持ち、それぞれ有生物主語を取る。これらに形式名詞を介入させた(38)の文は共に容認される。(38a, b)では「太郎」が主節動詞と補文動詞の主語を兼ねていることから、主節主語の「太郎」が PRO のコントローラーとして働いていることがわかる。このことから、(37a, b)の「終わる」と「終える」を主節動詞とする補文構造は共にコントロール構文を構成すると考えられる。

- (37) a. 太郎が朝刊を読み終わった
b. 太郎が朝刊を読み終えた
- (38) a. 太郎が朝刊を読むことを終わった
b. 太郎が朝刊を読むことを終えた (=7b)

(37)では、主節動詞の意味構造に使役が含まれるかどうかで、意味の違いが生じる。(37a)では、補文事象が表す行為を動作主が終了したことが表わされるのに対し、(37b)は、動作主によって続けられた補文事象の行為が終結したことが表わされる。

「終わる」と「終える」を主節動詞とする補文構造には、(39)のような自動詞構造も存在し、主語は動作主性をもたず、自律的に (autonomously) 補文事象が終了することを表す。しかしながら、主節動詞の意味構造に使役が含まれるかどうかに応じて、(39a)では「花が咲く」という花の自律的な行為の終了が表されるのに対し、(39b)では「花が咲く」という事象の終了が、あたかも「花」自らの力で遂げられたかのように解される。

- (39) a. 花が咲き終わった
b. 花が咲き終えた

(39a, b)の自動詞構造が表す意味の違いは、(40)の形式名詞を介入させた文の容認性の違いにも現れ、(38)の他動詞構造での「終わる」と「終える」の振る舞いと一致しない。

- (40) a. *花が咲くことを終わった
b. 花が咲くことを終えた

(40a)では形式名詞の介入が許されないのに対し、(40b)では「花」が主節動詞と補文動詞の主語を兼ねるため、主節主語の「花」がコントローラーとして働いていると考えられる。したがって、主節動詞が「終わる」の(40b)は上昇構文を構成しているのに対し、主節動詞が「終える」の(40a)はコントロール構文を構成しているとみなすことができる (cf. 岸本 2005: 51, Matsumoto 1996: 174)。

(39b)が無生物主語を取るコントロール構文であることは、コントロール構文では「主節動詞が有生物主語を選択する」という主節動詞の主語制限による説明においても、「PRO が有生物主語を選択する」という PRO の共起制限による説明においても反例のようにみえる。しかしながら、コントロール構文の(39b)が無生物主語を取るという事実は、自律的な振る舞い (autonomous behavior) をする擬似動作主 (pseudo-agent) という解釈を持つ PRO に沿って、PRO と同じ意味役割がコントローラーである主節主語に要求されるという共起制限によって説明できる。

コントロール構文において無生物主語が容認される現象は、英語においても特定の名詞句と共起する場合に観察でき、擬似コントロール (pseudo-control : Pustejovsky: 1995: 206) と呼ばれる。

- (41) a. The paint has finished dyeing. (Pustejovsky 1995: 206)
b. The leaves have finished falling.

Pustejovsky によると、(41)では上昇構文のように *fall* や *dye* の主語である *the paint* や *the leaves* が主語位置へ移動しているかのように見えるが、(42)で無生物主語が容認されないことから、(43)の無生物主語現象は統語的操作によるものではなく、語彙的な作用が働いていると考えられるという。つまり、(41)の擬似コントロール構文を構成する *finish* はコントロール動詞としてだけ働き、本来的には上昇動詞である *begin* がコントロール動詞として機能するような多義性は *finish* にはないという。

- (42) a. *It has finished raining. (Pustejovsky 1995: 206)
 b. *The sun has finished shining in my eyes.

さらに、Pustejovsky は、(43)に示すように、特定の述部との共起によって *paint* があたかも動作主のような自律的な振る舞いをみせることを指摘している。

- (43) The paint can dry on its own. (cf. Pustejovsky 1995: 206)

この自律的な振る舞いをする性質が *paint* の特質構造 (qualia information) に記されているため、特質構造によって疑似動作主の解釈が生じ、コントロール構文として文法的に容認されるという。Pustejovsky に従うと、(42a)の虚辞の *it* や(42b)の *the sun* は、疑似動作主の解釈を可能とする情報を特質構造として持たないため、疑似コントロールが不可能となる。疑似動作主の解釈を生じさせる情報を特質構造を持つ名詞句が、疑似コントロールを容認させているとの説明は、すなわち、その文法容認性を主節動詞 *finish* の主語制限に求めていると考えられる。

疑似コントロール構文の(41)と並行した例は日本語でも(44)で確認でき、(44a)はあたかも「ペンキ」自らの力によって「乾く」という状態変化が成し遂げられていると解釈される。

- (44) a. ペンキが乾き終えた
 b. 葉が散り終えた

一方、主節動詞が「終わる」の(45a)でも「ペンキ」が「乾く」という状態変化を自律的に終了したとことが表されるが、(39-40)で示したように、主節動詞に「終わる」を持つ自動詞構造は疑似コントロール構文を構成していないとみなせる。

- (45) a. ペンキが乾き終わった
 b. 葉が散り終わった

(44)と全く同じ補文を持ちながら(45)が疑似コントロール構文を構成しないことは、疑似動作主の解釈が「ペンキ」という名詞句の特質構造に備わることが疑似コントロール構文を成立させる要因ではないことを示している。

(44a)と(45a)では、補文の「ペンキが乾く」が「ペンキ」の自律的な振る舞いだと解釈されることによって、補文事象をコントロールする疑似動作主としての解釈が「ペンキ」に生じる。このことから、補文主語が疑似動作主という解釈を得ることによって、主節にコントローラーを要求する PRO として補文に現れる資格を補文主語が得ることができると仮定する。したがって、(44)は疑似動作主と同じ意味役割を主節動詞「終える」が付与可能なため、PRO の共起制限に違反することなく、コントロール構文が成立するといえる。対照的に、「終わる」を主節動詞とする(45)は、疑似動作主という解釈を得ることで補文主語が PRO の資格を得ても、PRO の共起制限が整わないため、疑似コントロール構文を構成しないといえる。

「終わる」による補文構造で PRO の共起制限が整わない理由として、(34-36)で示したように、自動詞の「終わる」にはコントロール用法が存在せず、また他動詞の「終わる」は有生物動作主しか外項に取らないため、疑似動作主に相当する意味役割を付与する能力が主節動詞の「終わる」にないためだと考えられる。

主節動詞の「終える」が疑似動作主に相当する意味役割を付与できることは、(46)において、無生物主語を取ることができることからわかる。

- (46) a. 株価が上昇を {終えた/*終わった}
 b. 天体がその一生を {終えた/*終わった}

また、(42)の文法容認性は、*finish* のアスペクト制約によるものだと考えられる。(42)の英語の例に対応する日本語の(47)も容認されない。2章2節の(27-30)でも示したように、(47)が容認されないのは、終了点のない事象を補文が表しているためで、補文に達成イベントを必要とする「終える」のアスペクト制約に反するからである。

- (47) a. *雨が降り終えた
b. *太陽が輝き終えた

本来的には上昇構文を構成すると考えられる「終わる」が、補文が表す事象に動作主を持つことでコントロール構文を構成する性質は、(48)に示す単文でもみられる。本来的には自動詞構造を取る「終わる」の内項名詞句に動作主性があれば、他動詞化が可能となる。

- (48) a. 講義が終わる / 講義を終わる
b. 紅葉が終わる / *紅葉を終わる

擬似コントロールの現象は、「尽くす」を主節動詞とする統語的複合動詞においてもみられる。(49a)に示すように、主節動詞「尽くす」はコントロール構文を形成するが(影山 1993: 152)、無生物主語を取る(49b, c)は擬似コントロール構文であると考えられる。

- (49) a. 学生が意見を出し尽くした
b. 意見が学生から出尽くした
c. 膿が出尽くした

(49b)の主語「意見」は人の考えを指し、また、カラ格でその出处 (source) が人であることが表されるため、「意見」という名詞句に動作主性が含まれているともいえる。しかしながら、補文が表す事象の「意見が出る」は、(49c)の「膿が出る」で膿が自然に体内から湧き出て来るものと捉えられることと同様に、あたかも「意見」が自ら人から湧き出て来るものとの解釈により、補文主語が擬似動作主の解釈を得ていると考えられる。したがって、主節にコントローラーを要求する PRO として現れる資格を得た補文主語が、PRO の共起制限に従い、擬似動作主と同じ意味役割を主節動詞「尽くす」に要求することで、擬似コントロール構文が構成されていると考えられる。

以上、*finish* とは異なり「終わる」が自動詞コントロール構文を構成しないことを踏まえ、「終える」による擬似コントロールの現象を、PRO の共起制限から説明した。無生物主語の自律的な振る舞いによって補文事象の終了を表す擬似コントロール構文は、補文主語に擬似動作主の解釈が生じることで補文主語が PRO として現れる資格を得ることに加え、PRO による共起制限に従って、擬似動作主に相当する意味役割が主節動詞から付与されることによって成立することを述べた。また、擬似コントロール構文の現象により、補文 PRO は有生物を選択するというよりは、むしろ補文が表す事象をコントロールする存在という解釈が成り立つことが、PRO の条件において重要であることが明らかとなった。

4. 自動詞化と可能動詞化

4.1. 統語的複合動詞

統語的複合動詞では、複合動詞全体で自動詞化するものがある(岸本 2005: 52)。(50a)の「読み終わる」は、(50b)のコントロール構文「読み終える」が統語的複合動詞全体で使役交替した自動詞と考えられる。また、(51a)の「売り切れる」は、(51b)の上昇構文「売り切る」からの自動詞化であると考えられる。

- (50) a. 本が「読み終わった」
 b. 太郎が「PRO 本を読み」終えた
- (51) a. 本が「売り切れた」
 b. 店員が「t 本を売り」切った

「切る」を後部要素とする複合動詞には、「叩き切る」のような前部要素が後部要素の手段を現す語彙的複合動詞も存在する (由本 1996、松本 1998: 52、影山 1999: 195、杉岡 2002: 136)。語彙的複合動詞は、(52a)のように、前部要素をテ形で置き換えて統語的表現で置き換えることができるのに対し、統語的複合動詞の(52b, c)は許されないという違いに現れる。

- (52) a. 鎖を叩き切った / 鎖を叩いて切った
 b. 本を売り切った / *本を売って切った
 c. 本を読み切った / *本を読んで切った

統語的複合動詞の自動詞化は、(50)の「読み終える」を例にすると、補文動詞「読む」の内項で、複合動詞の目的語として現れていた「本」が、「読み終わる」という自動詞の内項として主語に現れる。(50a)と(51a)が語彙的操作による使役交替であると考えられる理由として、これらの自動詞は(53)に示すように動作主を具現化できないことが挙げられる。

- (53) a. *太郎に本が読み終わった
 b. *店員に本が売り切れた

その一方で、(54b)の「読み切れる」は、(51a)の「売り切れる」と同様に「切る」を主節動詞とする統語的複合動詞を基盤とした複合動詞ではあるが、動作主を表すことができるかという点で、振る舞いを別にする。「読み切れる」は、補文動詞の内項が自動詞の内項として主語に現れる点では「売り切れる」と変わらないが、(54b)のように二格句で動作主を取る可能動詞として働く。また、「読み切れる」は可能動詞であることは、(54c)のように、内項を目的語としてヲ格を取る他動詞としても働くことからわかる。

- (54) a. 太郎が「t 本を読み」切った
 b. 太郎に本が読み切れた
 c. 太郎が本を読み切れた

以下では、(50a)の「読み終える」は、補文内項の「本」に備わる継続事態終了点という限界点 (boundedness) を要因として使役交替を引き起こすが、(51a)の「売り切る」の使役交替には、売買の事象フレームにおける買い手という背景行為者の存在が要因となることを示す。さらに、(51a)の「売り切れる」と、(54b)の「読み切れる」とに、動作主性の違いが現れるのは、「売り切れる」が使役交替という語彙的操作による自動詞化であるのに対し、「読み切れる」は、可能形態素の挿入という統語的操作によってコントロール構文が形成されたためであることを示す。

使役交替によって生じる自動詞化は、他動詞に対応する使役意味構造において使役者が抑制されることで、使役者が項として具現化しない自動詞が形成される語彙的操作と考えられる。典型的には、(55a)のような外的起因 (externally caused) をもつ状態変化動詞において使役交替は起こり、(55b)のような人間の意志や決断による状態変化、人間の内在的能力や情緒的反応は、内的起因 (internally caused) として区別され、使役交替が起こらないとされる (Levin 1993、Levin and Rappaport Hovav 1995)。

- (55) a. John broke the window. / The window broke.
 b. The army destroyed the temple. / *The temple destroyed.

(50a)の「読み終える」が使役交替する要因としては、「読む」という行為に伴って定量に達するという「本」に備わる継続事態終了点が挙げられる。つまり、動作主が関与を続ける「本を読む」という行為は、本の継続事態終了点に達することによって強制的に終了させられてしまうことが、使役者の表出を抑制する原因になると考えられる。また、(56b)の「編み終える」では、産物として「セーター」が出来上がった時点が、状態変化を指定する事態転換点として認知される。この事態転換点により「編む」という動作主の継続行為が強制的に終了させられるため、補文事象に関与を続けてきた使役者を抑制する要因となり、複合動詞が自動詞化すると考えられる。

- (56) a. セーターが[編み終わった]
 b. 太郎が[PRO セーターを編み]終わった

したがって、補文動詞が表す事象に対して継続事態終了点を指定しない内項名詞句は使役者への抑制力として働かないため、複合動詞が自動詞化しないことが予測される。(57)が示すように、職業を表すこともある「仕事」や、感情を表す「怒り」は継続事態終了点を指定しないほか、意志的行為者である「花子」などは、使役者に対する抑制力として働かないため、複合動詞は自動詞化しない。

- (57) a. 太郎が仕事をやり終えた / *仕事がやり終わった
 b. 太郎が怒りを静め終えた / *怒りが静め終わった
 c. 太郎が花子を送り終えた / *花子が送り終わった

「終える」を主節動詞に持つ統語的複合動詞はコントロール構文を基盤とする複合動詞である。一方、上昇構文を基盤とする「切る」を主節動詞に持つ統語的複合動詞では、(51)の動作主の項を表出できない自動詞に交替する「売り切る」タイプと、(54)の動作主の存在が密接不可分の可能動詞として働く「読み切る」タイプに分かれる。

(51)の「売り切れる」が自発動詞の働きをする要因として、売買の事象フレームにおける買い手という背景動作主の存在があると考えられる。買い手という背景動作主の存在は、(58a)の「酒が売れる」が自発動詞の働きをする際にも関与する。

- (58) a. 飛ぶように、酒が売れる
 b. 酒が切れる

(58a)は、売り手の意志や意図に関係なく酒が売れていくことを表し、(58b)は、酒があたかも蒸発するかのように酒瓶や身体からなくなることを表す。(58a, b)は共に「酒」の自律的な振る舞いを表すが、このような対象 (theme) の自律的行為を表す性質の動詞は、自発動詞と称されることもある。

「売る」「買う」は共通の売買の事象フレームを前提として成立する動詞であるとされる (Fillmore 1985, Jackendoff 1990: 181, 松本 2003: 69)。売買事象では、売り手が保有する酒の在庫数は売り手の販売行為により減少するが、その反面、在庫数の変化は買い手による購買行為によって引き起こされるともいえる。「酒が売れる」や「酒が売り切れる」が自発動詞として成立するのは、酒の在庫数の減少が売り手の販売行為だけに委ねられるものではなく、買い手による購買が不可欠だからといえる。対照的に、(59)の「買い切れる」は自発動詞としての意味を持たず、可能動詞としての解釈しかない。これは、買い手が保有する品物の数に変化を引き起こす存在が購買行為を行う買い手自身に限られるためだといえる。

(59) 太郎 {に／が} 全ての酒が買い切れた

自発動詞と形態を同じくする動詞に可能動詞がある。(60a)の「使える」は、パソコンの使用可能状態が表されることから、パソコンの自律性が解釈されるため、自発動詞であると考えられる。一方、(60b)に挙げる「使える」は(60a)の自発動詞と同じ形態ではあるが、動作主が存在が不可欠な動詞であることから、「使う」の可能形であるといえる。可能形の動作主は(60b)のように二格だけでなくガ格でもマークできる。さらに、(60b)の可能形が、動作主による事象のコントロール性から再構成 (restructuring : Sugioka 1985, 岸本 2005: 54) され、(60c)のように対象がヲ格でマークされる他動詞が形成されると考えられる。

- (60) a. パソコンが使える
b. 太郎 {に／が} パソコンが使える
c. 太郎がパソコンを使える

(60)に挙げた「使える」が無生物主語を許すのは(60a)の自発動詞の場合のみで、(60b, c)の可能形や可能動詞では、動作主である有生名詞が主語となる。(60b)の二格句が可能形の主語であることは、動詞に尊敬語化接辞の「お～になる」をつけ主語を尊敬語化する (subject honorification) テストから判断できる (Shibatani 1978, 久野 1983: 8, 影山 1993: 163, 岸本 2005: 48)。二格句で動作主をマークする(61a)は、ガ格句で動作主をマークする(61b)と同じ振る舞いをすることから、二格句やガ格句で表示される有生名詞は主語であることがわかる。

- (61) a. 太郎にパソコンがお使いになれる
b. 太郎がパソコンをお使いになれる

「読み切れる」タイプの複合動詞も、(54)に挙げたように、その動作主を二格とガ格でマークできることから、可能形として働いていると考えられる。さらに、「読み切れる」タイプは、(62)に挙げるように、無生物主語を取らない。

- (62) a. *戦火に街が焼き切れた / 戦火が街を焼き切った
b. *雨雲に空が覆い切れた / 雨雲が空を覆い切った

可能形が有生物主語を必要とする振る舞いは、コントロール構文の特徴と一致する (長谷川 1999: 125)。したがって、(63a)のような補文構造を仮定することができる。さらに、動作主の存在が不可欠の「読み切れる」タイプの複合動詞も可能形であることから、(63b)のような補文構造を仮定することができる。

- (63) a. [_{IP} [_{VP} 太郎_i [_{VP} PRO_i パソコン 使 w] e] る]
b. [_{IP} [_{VP} 太郎_i [_{VP} PRO_i 酒 飲み切 r] e] る]

(64)は後項動詞に「切れる」を持つ可能形の複合動詞、(65)は統語的複合動詞全体で可能形を構成する例であるが、その生産性は高い。生産性の高さからも、可能形化は統語的操作であると考えられる。

- (64) a. 太郎 {に／が} 仕事がやり切れた / 太郎が仕事をやり切れた
b. 太郎 {に／が} 怒りが静め切れた / 太郎が怒りを静め切れた
c. 太郎 {に／が} 花子が送り切れた / 太郎が花子を送り切れた

- (65) a. 太郎にマラソンコースが走り通せる
 b. 太郎に服が作り直せる
 c. 太郎に鉱山が掘り尽くせる
 d. 太郎に本が読み終われる

これまで、後項動詞に「切れる」を持つ複合動詞には、自発動詞と可能形があることを論じた。複合動詞が自発動詞として働くか可能形として働くかについては、次のことが考えられる。(58a)に挙げた「酒が切れる」が「酒」の自律的振る舞いを表す自発動詞であるのにもかかわらず、(63b)の「酒が飲み切れる」に自発動詞の解釈がないのは、前項動詞の「飲む」が動作主を必要とする動詞であるためだといえる。一方で、(51a)の「酒が売り切れる」が前項動詞に動作主を要する「売る」を取りながら可能形としての解釈を有さないのは、自動詞化の要因ともなる動作主の表出を抑制する背景動作主の存在が「売る」にあるからだといえる。

以上、統語的複合動詞の自動詞化には、「本を読み終える」や「セーターを編み終える」のように、内項名詞句である対象が持つ限界性が使役者の対象に対する働きかけへの抑制力として働くものと、「酒を飲み切る」のように補文動詞が表す事象の背景に存在する動作主の存在が使役者への抑制力として働くものがあることを示した。さらに、統語的複合動詞には、「本が読み切れる」のように複合動詞全体で可能形となることで、コントロール構文を形成するものがあることを示した。複合動詞全体の可能形においても、主節にコントローラーを要求することができる PRO の資格を得た補文主語が、PRO の共起制限に従い、補文 PRO と同じ意味役割を可能形態素の-(r)e に要求することで、コントロール構文を構成しているといえる。

4.2. 語彙的複合動詞

以下では、複合動詞全体で自動詞化する語彙的複合動詞を取り上げる(影山 1993: 110、松本 1998: 57)。まず、統語的複合動詞「売り切る」の自動詞化現象でみられた統語的に具現化する動作主とは別の行為者が存在するという事象解釈が、語彙的複合動詞「打ち上げる」の自動詞化においてもみられる相似点を示す。さらに、「編み上げる」のような完了アスペクトの解釈を持つ語彙的複合動詞の自動詞化を取り上げる。「編み終える」のような統語的複合動詞では、その内項名詞句は補文動詞の限界性 (delimiter) を指定したが、統語的複合動詞とは構造が異なる語彙的複合動詞では、その内項名詞句は複合動詞が表す状態変化事象の到達点 (goal) を指定する違いがあることを示す。その上で、「編み終える」は内項名詞句の限界性が使役者への抑制力として働いたが、結果名詞を内項に取る「編み上げる」では、状態変化が完了した結果状態が結果産物によって表されることが使役者への抑制力として働き、自動詞化することを示す。

(66a)の「打ち上がる」は、(66b)の「打ち上げる」からの自動詞化と考えられる。

- (66) a. 小瓶が波で浜に [打ち上がった]
 b. 波が小瓶を浜に [打ち上げた]

「上げる」は移動経路が語彙化 (lexicalization: Talmy1985) された使役移動動詞である(松本 1997: 171)。使役は、開始時使役 (onset causation) と継続使役 (extended causation) に大別することができる (Talmy 1985)。開始時使役とは、使役者の働きによって運動を起動した被使役者が自律的に運動を実現していくもので、継続使役とは、使役者が被使役者の運動の起動から完了に至るまで全てに携わる。

(66b)に挙げた「打ち上げる」は開始時使役を表す。使役者「波」が被使役物「小瓶」を「浜」に上げる手段として「打つ」という働きかけを行う。この波の働きかけによって起動の機会を与えられた小瓶は自律性を持つ主体行為者として認識され、自動詞の「打ち上がる」へと

使役交替がなされると考えられる。このため、(67b)の自動詞「打ち上がる」では、被使役物の移動事象が自律的動作として解釈される。すなわち、使役者の影響から離れた被使役者の動きが自律的振る舞いをする主体行為者としての解釈を得ることによって、自動詞化が生じているといえる。

したがって、継続使役を表す動詞を前項動詞にした(67)や、意志的行為者が使役者への抑制力として働く(68)は自動詞化しない。

- (67) a. 太郎が車を海から引き上げた → *車が海から引き上がった
 b. 太郎がハンドルを押し上げた → *ハンドルが押し上がった
 c. 太郎が傘を取り上げた → *傘が取り上がった
- (68) a. 太郎が花子を学校から誘い出した → *花子が学校から誘い出
 b. 太郎が花子を学校から呼び出した → *花子が学校から呼び出た

しかしながら、(69)は開始時使役でありながら使役交替しない。

- (69) a. 叩き割る、叩き切る / *叩き割れる、*叩き切れる
 b. 蹴り倒す、蹴り上げる / *蹴り倒れる、*蹴り上がる
 c. 投げ出す、投げ付ける、投げ飛ばす / *投げ出る、*投げ付く、*投げ飛ぶ

(69)の複合動詞は特定の行為者を強く含意するため、使役交替しないと考えられる。特定の行為者を強く含意する動詞が使役交替しないことは、(70)においてもみられる。

- (70) a. John broke the window. / The window broke.
 b. John cut the tree. / *The tree cut.

状態変化動詞である(70a)の *break* が使役交替を起こすのに対して、同じ状態変化動詞の(70b)の *cut* が使役交替しない理由として、*cut* が特定の行為者を強く含意するためだと説明される (Levin and Rappaport Hovav 1995)。 *break* と *cut* との使役交替に関する現象の相違は、動詞の意味構造で使役者と同定された手段行為者が語彙化されている状態変化動詞と、手段を問わずして対象物を状態変化させる動詞が自然言語に存在していることを示す (岸本・影山 2001)。

(66)に挙げた「打ち上げる」は、前項動詞が後項動詞の手段を表すという意味的な関係をもつが (由本 1996、松本 1998: 52、影山 1999: 195)、その行為者は有生物に限られず、「波」のような無生物でも行為者になる。このため、「打ち上げる」は使役交替するといえる。一方、(69)の「叩く」「蹴る」「投げる」などを前項動詞に持つ複合動詞は、限られた行為者しか指さない。単純動詞では「割る／割れる」のように使役交替が可能であった状態変化動詞は「叩く」を前項動詞に取ることで、有生物による行為しか表さない複合動詞「叩き割る」を形成する。すなわち、「叩き割る」は意味構造上で手段行為者が使役者と同定された複合動詞であるため、使役交替しないと考えられる。

対照的に、(71b)に挙げる「編み上げる」は継続使役であり、人による行為しか表さないのにも関わらず、使役交替する。(71a)の自動詞「編み上がる」は、(71b)の他動詞「編み上げる」が語彙的複合動詞全体で使役交替した自動詞と考えられる。

- (71) a. セーターが〔編み上がった〕
 b. 太郎がセーターを〔編み上げた〕

「上げる／上がる」を後項動詞にもつ(71)の語彙的複合動詞は、完了アスペクトを表すとされる (影山 1993: 109、姫野 1999: 35)。統語的複合動詞の「セーターを編み終える」では、

「セーター」はその出来上がり事を事態転換点として、補文動詞「編む」が表す継続事象に境界点 (delimiter) を設ける機能を負った。一方、語彙的複合動詞の(71)において、「セーター」の出来上がり時点である事態転換点は、複合動詞が表す状態変化の到達点 (goal) に指定されていると考えられる。さらに、語彙的複合動詞の内項が取る「セーター」が状態変化の結果状態を表すことが使役者に対する抑制力として働き、自動詞化を引き起こすと考えられる。

「編み上げる」の内項である「セーター」が複合動詞が表す状態変化の到達点として働くことは、(72a)において「セーター」が着点を表す二格を取ることからわかる。一方、前項動詞の「編む」は、(73)が示すように二格句とヲ格句との場所句交替を容認しない。したがって、「編み上げる」が着点を表す二格を容認するのは、後項動詞「上げる」の項を複合動詞全体の項として受け継いでいるためといえる。

- (72) a. 毛糸をセーターに編み上げた
b. ??毛糸をセーターに編み終えた

- (73) a. *毛糸をセーターに編んだ
b. セーターを毛糸で編んだ

二格句とヲ格句による場所句交替は、(74)の「塗る」でよく知られる。二格句で動詞が表す行為の場所が表される(74a)は移動物の位置変化を表し、ヲ格句で動詞が表す行為の場所が表わされる(74b)は場所の状態変化を表すとされる (岸本・影山 2001: 126)。つまり、壁塗り交替と呼ばれる(74)の現象は、移動物の動きを指定する意味と、移動の結果として場所に影響を及ぼすという意味の二面性を動詞が持つことで可能になるという。

- (74) a. ペンキを壁に塗った
b. 壁をペンキで塗った

壁塗り交替に従えば、「編み上げる」の場所句交替は次のように考えられる。(72a)の「セーター」が二格句を取る場合には、編むという行為によって毛糸がセーターへ状態変化を遂げたことが表される。一方、(71b)の「セーター」がヲ格句を取る場合には、編むという行為の結果としてセーターの完成が表される。つまり、内項の「セーター」は「編み上げる」という状態変化が完了した場所を表すと同時に結果状態を表すといえる。

これらのことから、「編み上げる」という状態変化の結果状態を表すために、結果名詞の「セーター」が複合動詞の内項に必要とされるといえる。言い換えれば、内項名詞句が結果状態を表すことによって状態変化の完了をも表すことになり、これが使役者の表出を抑制する要因になると考えられる。

したがって、(75a)の「毛糸」のように、前項動詞の行為の結果産物にあたらないものや、(75b)の「役」のように、職務や役目など結果産物以外の意味を持つものを内項名詞句に取る時には自動詞化しない。また、(75c)の「作る」のような達成動詞を前項動詞に持つ語彙的複合動詞は、自動詞化しない(影山 1996: 111)。

- (75) a. 毛糸を編み上げる / *毛糸が編み上がる
b. 役を演じ上げる / *役が演じ上がる
c. ドレスを作り上げた / *ドレスが作り上がった

(76)に挙げるように「編み上げる」「作り上げる」の前項動詞は共起する時間副詞に差異がみられる。(76a)に示す「編む」は時間副詞の「30 分間」と「30 分で」の共起を許すが、(76b)の「作る」は「30 分間」の共起を許さない。

- (76) a. セーターを {30 分間／30 分で} 編む
b. ドレスを {*30 分間／30 分で} 作る

「30 分間」という時間副詞と共に起する「編む」は限界性 (telicity) をもたない活動動詞として働くことがわかる。したがって、自動詞化する複合動詞の前項動詞には、状態変化が完了するまでの様態を表す「編む」のような活動動詞が必要とされるといえる。

以上の自動詞化に対する考察から、統語的複合動詞と語彙的複合動詞では、使役者の働きかけへの抑制力として働く性質に相似点と相違点が見出せた。統語的複合動詞の「本を読み終える」や「セーターを編み終える」では、内項名詞句の「本」が有する継続事態終了点や「セーター」が有する事態転換点といった限界性が使役者に対する抑制力として作用するのに対し、アスペクトを表す語彙的複合動詞「セーターを編み上げる」では、内項名詞句「セーター」が状態変化の結果状態を表すことが使役者に対する抑制力となることを示した。また、統語的複合動詞の「売り切る」では売買の事象フレームにおける背景的動作主である買い手の存在が使役者の表出を抑制する要因であったが、語彙的複合動詞の「打ち上げる」では使役者の影響から離れた被使役者の動きが、自律的振る舞いをする主体行為として解釈されることが自動詞化の要因になることが示された。

5. 結び

本稿では、疑似コントロール構文に生じる疑似動作主の解釈を題材に、英語でも日本語でも、補文構造を取るコントロール構文の文法の適応性を決定づけるのは、主節動詞の選択制限ではなく、PRO の共起制限であることを示した。また、複合動詞の自動詞化を題材に、使役交替を起こす要因が、統語的複合動詞では補文内項の名詞句に備わる限界性であるのに対し、語彙的複合動詞では、内項の結果名詞が示す結果性が関与することを示した。さらに、統語的複合動詞では事象フレームの背景動作主が、語彙的複合動詞では使役者の影響から離れた被使役者が、使役意味構造の使役者の表出を抑制する存在になるという差異があることを示した。

特に、統語的複合動詞における PRO による主節主語との共起制限が補文外項が主節外項に同一指標を要求するという同定制約を反映していること、また、疑似コントロール構文の成立には語彙的な作用があることが明らかにできたことは、語彙的複合動詞が持つ主語一致の原則 (影山 1993、由本 1996、松本 1998) との相違点や共通点を見出す課題において重要な足がかりになると考える。統語的複合動詞の PRO による共起制限は、語彙的複合動詞の構成要素である二つの動詞がそれぞれ携える項構造が、いかにして語彙的複合動詞の項構造として統合されるのかという中心的な議論にも結びつくものであると考える。

参考文献

- 伊藤たかね・杉岡洋子. 1992. 『語の仕組みと語形成』研究社.
影山太郎. 1993. 文法と語形成』ひつじ書房.
影山太郎. 1996. 『動詞意味論』くろしお出版.
影山太郎. 1999. 『形態論と意味』くろしお出版.
影山太郎(編). 2001. 『日英対照動詞の意味と構文』大修館書店.
影山太郎・由本陽子. 1997. 『語形成と概念構造』研究社.
岸本秀樹. 2005. 『統語構造と文法関係』くろしお出版.
久野暉. 1983. 『新日本文法研究』大修館書店.
柴谷方良. 1978. 『日本語の分析』大修館書店.
長谷川信子. 1999. 『生成日本語学入門』大修館書店.
姫野昌子. 1999. 『複合動詞の意味用法と構造』ひつじ書房.

- 松本曜. 1998. 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114: 73-83.
- 松本曜. 2003. 『認知意味論』大修館書店.
- 由本陽子. 1996. 『互恵性と語彙概念構造－日本語の『動詞＋動詞』の複合語形成について－』言語と文化の諸相－奥田博之教授退官記念論文集－』105-118 英宝社.
- 由本陽子. 2005. 『複合動詞・派生動詞の意味と統語：モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』ひつじ書房.
- Bhatt, Rajesh, and Roumyana Pancheva. 2006. Implicit Arguments. In Martin Everaert, and Henk van Riemsdijk (eds) *The Blackwell Companion to English Syntax, volume 2*. Oxford: Blackwell.
- Burzio, Luigi. 1986. *Italian Syntax: A government-Binding Approach*. Dordrecht: Reidel.
- Carnie, Andrew. 2006. *Syntax: A Generative Introduction 2nd edition*. Oxford: Wiley Blackwell.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Dowty, David. 1991. Thematic Proto-Roles and Argument Selection. *Language* 67: 547–619.
- Fillmore, Charles J. 1985. Frames and the semantics of understanding. *Quaderni di Semantica*, 6-2, 222–254.
- Fukushima, Kazuhiko. 2005. Lexical V-V compounds in Japanese: Lexicon vs. Syntax. *Language* 81, 568–612.
- Grimshaw, Jane. 1990. *Argument Structure*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Idan, Landau. 2000. *Elements of Control: Structure and Meaning in Infinitival Constructions*. Kluwer Academic Publishers.
- Jackendoff, Ray. 1990. *Semantics Structures*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Jackendoff, Ray. 1996. The Proper Treatment of Measuring Out, Telicity, and Perhaps Even Quantification in English. *Natural Language and Linguistics Theory* 14:2, 305–354.
- Levin, Beth. 1993. *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago, Ill.: University of Chicago Press.
- Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA.: MIT Press
- Matsumoto, Yo. 1996. *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'*. Stanford, California and Tokyo: CSLI and Kurosio.
- Nakau, Minoru. 1973. *Sentential complementation in Japanese*. Tokyo: Kaitakusha.
- Nishigauchi, Taisuke. 1993. Long Distance Passive. In Nobuko Hasegawa (ed) *Japanese Syntax in Comparative Grammar*. 79–114. Tokyo: Kurosio.
- Nishiyama, Kunio 1998. V-V compounds as serialization. *Journal of East Asian Linguistics* 7, 175–217.
- Plag, Ingo. 2003. *Word-formation in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Perlmutter, David M. 1970. The two verbs begin. In Roderick A. Jacobs, and Peter S. Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*. 107–119. Waltham, MA: Blaisdell
- Perlmutter, David M. 1978. Impersonal passives and the unaccusative hypothesis. *BLS4*, 157–189.
- Pustejovsky, James. 1995. *The generative lexicon*. MIT Press.
- Pustejovsky, James, and Pierrette Bouillo. 1995. Logical Polysemy and Aspectual Coercion. *Journal of Semantics* 12. 133–162.
- Roeper, Thomas 1987. Implicit Arguments and the Head-Complement Relation.

- Linguistic inquiry* 18: 267–310.
- Saito, Mamoru. 2000. Predicate raising and theta relations. In Linguistic Society of Korea (ed) *Proceeding of 2000 Seoul international conference on language and computation*, 85–113.
- Shibatani, Masayoshi. 1985. Passives and related constructions: A prototype analysis. *Language* 61, 821–848.
- Shibatani, Masayoshi. 1973. Where Morphology and Syntax Clash: A Case in Japanese Aspectual Verbs. 『言語研究』 64.
- Soames, Scott, and David Perlmutter. 1979. *Syntactic argumentation and the structure of English*. Berkeley: University of California Press.
- Sugioka, Yoko. 1985. *Interaction of Derivational Morphology and syntax in Japanese and English*. New York: Garland.
- Talmy, Leonard. 1985. Lexicalization patterns: semantic structure in lexical forms. *Language Typology and Syntactic Description: Volume 3, Grammatical Categories and the Lexicon*, 57–149. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tenny, Carol 1992. The aspectual Interface Hypothesis. In Ivan A. Sag, and A. Szabolcsi (eds) *Lexical Matters*. 1–27. Stanford: CSLI Publications.
- Tenny, Carol. 1994. *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer: Dordrecht.
- Vendler, Zeno. 1957. Verbs and times. *Philosophical Review* 66-2. 143–160.
- Williams, Edwin. 1980. Predication. *Linguistic Inquiry* 11, 203–238.
- Williams, Edwin. 1985. Pro and the subject of NP. *Natural Language and Linguistic Theory* 3: 297–315.